

医療対話シンポジウム (山口県医療事故調査合同協議会)

と き 令和元年 10 月 26 日 (土) 15:00 ~

ところ 山口グランドホテル 鳳凰の間

[報告:副会長 林 弘人]

当協議会は、山口県医療事故調査委員、郡市医療事故調査担当理事及び山口県医療事故調査支援団体に参集していただき、情報交換を行うことを目的に合同協議会として開催している。

会長挨拶

河村会長 医療機関と患者間で発生する紛争については多くの場合で、ボタンの掛け違いによる誤解や説明不足が要因となっている。本会においては、昨今、医療メディエーターの養成に取り組んできたが、より裾野を広げて、多くの医療関係者に医療対話力のスキルアップを促すことで、不要な医療紛争の減少を図ろうと考えており、今回のようなシンポジウムを企画し、今後も複数回開催したいと考えている。

報告

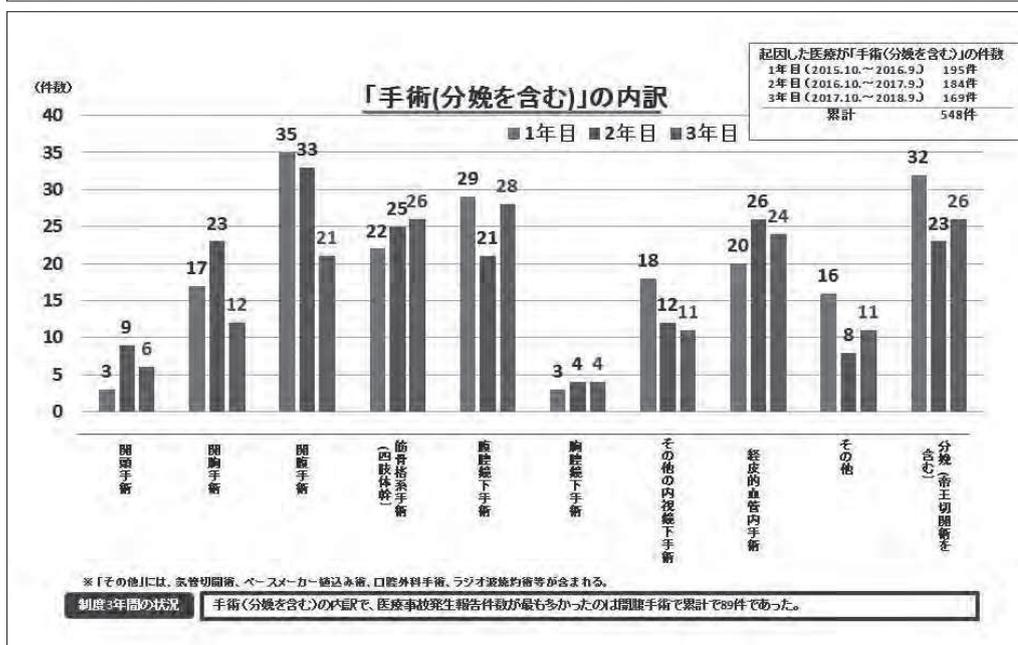
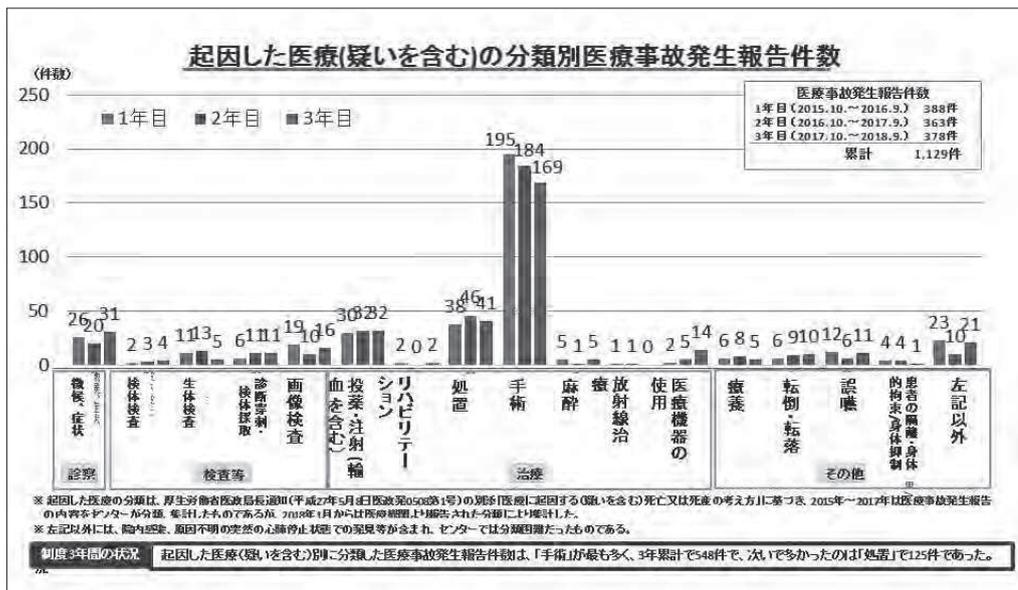
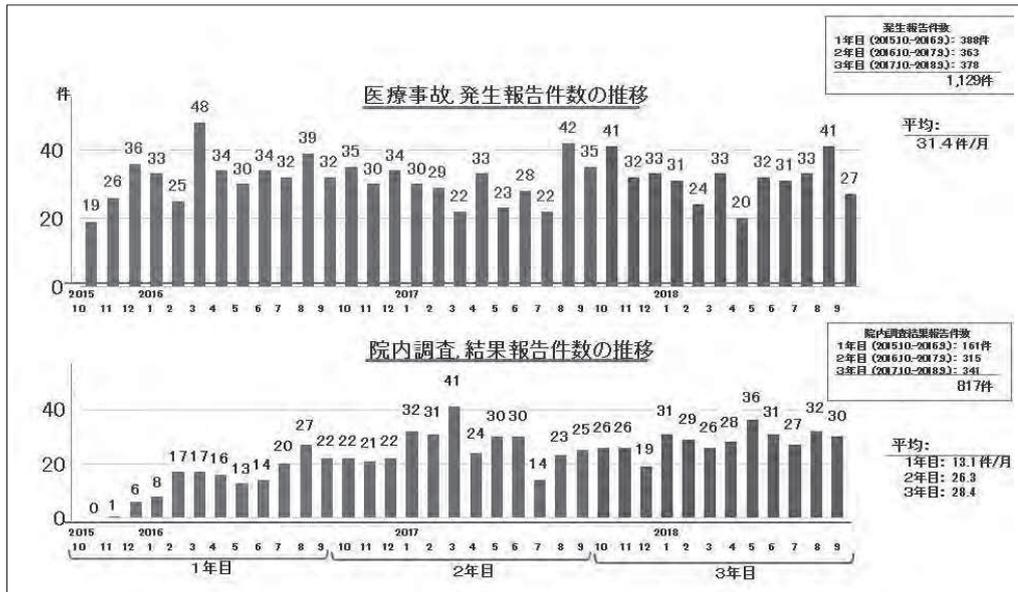
山口県の医療紛争及び医療事故調査の現状について

山口県医師会副会長 林 弘人

「全国及び県内の医療事故調査の状況」並びに「起因した医療の分類別医療事故発生報告件数」等について説明（次頁参照）するとともに、県内において実施された 8 施設における「医療事故調査委員会」の調査結果について説明した。

※調査事案資料については個別事案であるため割愛する





講演 I

今求められる ことばの力 聴く力

アナウンサー (元 NHK アナウンス室長)

山根 基世

医師にとって「ことば」とは特別に大切なものとなる。その「ことば」によって弱者(患者)は意気消沈したり、逆に力が湧いてきたり、その人の人生そのものが係わってくる。身近な話としては、がんを患って



いた(NHKの)先輩の女性理事が「先生(医師)は私をがん患者としてしか見ていない。診察中もPCの画面を見たまま話をされるので、とても悲しい」と言っていたのを聞いたことがある。確かに現在はカルテも電子化され便利になったが、紙カルテの時代は、汚れたシミを見るだけで患者の辿ってきた病状が分かるというところもある。今、日本の「ことば」は大きな転換期を迎えている。その昔は、話ことばから文字の時代へ移行し、ヨハネス・ゲーテンベルクの時代の活版印刷により、文字は記録される時代となった。近代は、その記録文字によって物事に係わる生活をし、面倒ではあるがその中でいろいろなことを深く考え、検討したりしてきた。しかし、現在はネットことばが世の中を席卷し、スピードが第一となり、特に推考することもなく底の浅いことばで瞬間的に人と繋がる。芥川賞作家の藤原智美のエッセイ『ネットで「つながる」ことの耐えられない軽さ』を繰り返し読んでみたが、その中にはネットが人間を変えつつある不安や不自由さが描かれており、大変共感した。私自身も最近、深く考えずにコピーペを使う場面などがあり、自分がなくなっていくような軽さを感じたり、電車に乗れば人々はそれぞれのスマホで、その奥を覗いているだけというように、ネットに思考を曲げられている。「いいね」だけで人と人が繋がる軽さは耐えられないものである。

時代の変化により、医師と患者もフラットな関係が求められることもあり、対話力は重要なコンテンツとなってきた。デール・カーネギーの「人

に好かれる六つの条件」に「①誠実な関心、②笑顔を絶やささない、③名前を覚える、④聴き手にまわる、⑤興味のありかを探る、⑥心から褒める」とある。「名前を覚える」については田中角栄元首相は抜きん出ており、相手の奥さんや子どもの名前を憶えて、話の中でタイミングよくそれを口に出すことで人心掌握していたと聞く。また、森鷗外の孫である小堀鷗一郎は優秀な(東京大学附属病院の)外科医であったが、自身の医療が職人的になり過ぎた医師生活を顧みて、晩年は在宅医療に傾注し、患部だけを診るのではなく、家族を含めて患者と向き合い、がんの末期患者等と心からのことばを交わしながら医療に取組み、『死を生きた人びと 訪問診療医と 355 人の患者』等を執筆されている。

私も長い間「ことば」に係わってきたが、人の自尊心を傷つけると厄介なものである。3歳の子どもでも自尊心はあるという。これは自分が人間であるという原点なのであろう。最近の子どもの虐待事件の報道をみると、加害者の親が社会で不当な扱いを受けた挙句、自尊心を傷つけられ、人を大切にすることができなくなっているように思われる。では今、何が必要かと言えば“聴く力”ではないかと思う。1970年代、カラオケが普及したことが原因だろうか、人はマイクを持って自説を唱えることが普通になった。皆が「言いたい」「発信したい」、人の話を聴くことは後回しとなった。アナウンサーの仕事は話もするが、その3倍以上は聴く仕事である。人の話は本当に面白く、細胞を揺さぶられ、とてもクリエイティブで自分が成長することができる。聴く力がなくなると心が荒み、孤独になる。すぐにキレて人を攻撃したりして、周りに話を聴いてくれる人もいなくなるのであろう。医師の仕事でも「黙って患者の話を聴け」と言われても時間に追われて大変だと思うが、一度、「よし、聴こう」としてみたら、自分の漂う気配が変わり、患者は一人の人間として見られていることに喜びが感じられるものだと思うが如何だろうか。

講演Ⅱ

方言と人間関係

中原中也記念館名誉館長

(元山口女子大学 (現:山口県立大学) 文学部教授)

福田 百合子

大江健三郎 先生がノーベル賞を受賞された後に、現在の県立大学に招き講演をお願いしたことがある。大江先生は四国育ちで、やがて中央 (東京) に出て行くことになるが、一番のコンプレックスは「ことば」



であったと言われ、おそらくは本州の西端で育った中原中也も同じコンプレックスがあった中で、あのような作品が生まれたのではないかと述べられていた。確かに中也の詩「山羊の歌」にある「汚れっちまった悲しみに」のことばには促音が 2 か所もあるが、このときの背景、人間関係、女性をめぐるライバルとの関係などから、東京弁をマスターしようとした様子が窺える。

「ことば」には、“話ことば”と“書きことば”とがあるが、書きことばは改まった気持ちになる。書きことばも明治の前期には文語体が使われ、それが当時の常識的な文学者の在り方であり、樋口一葉も文語体を使っていた。中也の時代は口語体となるが、作品は標準語を用い、故郷への手紙は

方言を用いた。それが中也にとって現状を正確に伝える一番の方法であり、気を許したときに人と気持ちを共有できる方法だと考えていたと思われる。

明治維新において吉田松陰、高杉晋作などは文語体を使っていた。余談であるが高杉は本妻と愛人で文語体と方言を使い分けていたとされる。この時代のことばは、NHK でもドラマ化された井上ひさしの小説「国語元年」によると、方言は通行手形のようなもので、鹿児島と東北では意図的にことばが通じないようにしていたという。明治以降は共通語が必要になったことから、薩摩、長州、四国、関東の人間が家族ともども一か所に集められて、一緒に生活をさせ、共通言語を作っていたとのことである。時代の変化により日本全体の意思統一の道具が必要になったのである。

パネルディスカッション

進行：山口県医師会副会長 林 弘人

以下の質問について意見交換を行った。

- ①人の興味を引き付ける話し方・聴き方について
- ②医療メディエーションでいう「深層の思い」を引き出す話し方・聴き方について

自動車保険・火災保険・積立保険・交通事故傷害

保険・医師賠償責任保険・所得補償保険・傷害保険ほか

あなたにしあわせをつなぐ

損害保険ジャパン日本興亜株式会社 代理店
共栄火災海上保険株式会社 代理店

山 福 株 式 会 社

TEL 083-922-2551